

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K17122

研究課題名（和文）政策担当者のインセンティブと金融政策委員会のデザイン

研究課題名（英文）Policymakers' incentive and the Design of Monetary Policy Committees

研究代表者

盛本 圭一（Morimoto, Keiichi）

明治大学・政治経済学部・専任准教授

研究者番号：50609815

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、金融政策を担当する金融政策委員会が直面する誘因の問題に焦点を当て、望ましい金融政策委員会制度の設計を理論的に考察した。情報透明性と委員のキャリア形成意識などにより委員は既存の理論が想定していなかった誘因を持ち得るが、それを反映した簡潔な理論モデルを作成し、厳密な分析をおこなった。具体的には、金融政策委員会の最適人数やそれと意思決定方法の関係を調べ、委員間の協調誘因が強い環境や中位者投票ルールで合意形成がなされる環境では、小さい委員会を形成するべきであることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、金融政策委員会の意思決定を織り込んだ金融政策の理論分析は十分おこなわれておらず、マクロ経済学における本件の理論的な新規性は高い。また、委員会における透明性とキャリア形成意識という先端的なミクロ経済理論のトピックを具体例に応用し、その含意を集团的意思決定の設計という文脈で引き出している。政策決定に関する透明性が重視される現代において、それを前提とした政策制度の設計を論じることは、学術研究が果たすべき重要な社会的貢献であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the incentive structure of the actual policymakers, this program reexamines the design of monetary policy committees in a theoretical framework. The model adopted in this program incorporates the incentive caused by transparency and the carrier concern of committee members. The author explores the optimal size of the monetary policy committee and the role of the voting rules, and find the followings. When the coordination motive among the committee members is strong, smaller monetary policy committees improve social welfare. The same result holds under the median-voting rule.

研究分野：マクロ経済学

キーワード：マクロ経済学 金融政策 委員会

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、金融政策のデザインはマクロ経済学の主要テーマの一つとなっているが、この背景にはバブルや金融危機などへの反省から生まれた金融政策の実務上の発展がある。具体的には、多くの国の中央銀行で主に次の二つの制度改革が進んだことである。一つは中央銀行と市場とのコミュニケーションが重視される中、情報公開および政策アナウンスメントの制度が整備されたことであり、もう一つはより正確かつバランスの取れた意思決定が求められ、専門の委員会による政策運営が法定化されたことである。このような実情を踏まえ、情報透明性や委員会のデザインは現代の重要テーマとして大きく取り上げられるようになった。しかし、金融政策委員の直面するインセンティブを適切にモデル化することは、金融政策デザインの大きな課題であるのが現状である。

(2) 一方で、近年のマクロ経済理論では、専門家の行動や委員会の意思決定理論の研究が盛んに行なわれている。例えば、専門家のキャリア形成意識と情報公開時の行動パターンについて分析や、専門家集団としての委員会の決定に情報公開制度と個人のキャリア形成意識が及ぼす影響を分析した研究がある。さらに、米国連邦準備制度の金融政策委員会である FOMC の委員を務めた Blinder は、前述の文献を含む多くの著作で現実の金融政策委員会での情報公開とキャリア形成意識の重要性を繰り返し強調している。これが多くの金融政策のシンポジウム等で取り上げられ支持されていることに鑑みれば、金融政策委員会の設計を行なうにあたって、情報公開と委員のキャリア形成意識を織り込んだデザインが必要であるといえる。

2. 研究の目的

今回のプロジェクトの目的は、中央銀行の情報透明性と金融政策委員会の設計問題に関するいくつかの基本的論点を考察し、制度設計上の含意を与えることである。具体的には、金融政策に関する情報公開の役割と金融政策委員会の意思決定との関係を分析して、その最適な人数・人員構成を再検討し、望ましい投票ルールを探ることである。この研究は、現代の金融政策の大きな課題である市場とのコミュニケーションという問題を踏まえた上で、委員会による意思決定という制度上の新しい側面を開拓するものである。したがって、金融政策の実務上の重要事項に対する含意の提供と具体的応用を通じたマクロ経済理論や他分野へのフィードバック効果を生むことが研究目的となる。

3. 研究の方法

(1) まず、情報公開のもとで委員が個人のキャリア形成を考慮する金融政策モデルを作り、理論分析する。具体的には情報透明性と集団的意思決定のマクロ経済理論で考慮される委員間の協調誘因を金融政策モデルに導入する。

(2) 金融政策委員会のデザインにおける主要な論点として、委員会の最適人数を分析する。その際、分析を見通しよくおこなうため、まずは金融政策モデルとは限らない一般の協調ゲームの理論モデルで簡潔な分析をして、理論的な含意を明確にする。そのうえで、同じメカニズムを金融政策分析のモデルに拡張し、金融政策委員会の最適人数を分析する。また、インフレ率と金融政策委員会の人数など、金融政策分野の実証的事実との今回の理論モデルが整合的であるかをチェックする。また、投票ルールのあり方が上記の点に与える影響についても考察する。

(3) 金融政策委員会の意思決定から出発する理論モデルの拡張を試みる。金融政策委員の選好の不確実性など、より広範なトピックの分析をおこなう。

4. 研究成果

(1) 「研究の方法(2)」で述べた簡潔な協調ゲームの理論モデルにより、透明性による協調誘因が集団的意思決定における個人の選択に与える影響を分析することができた。協調誘因には、環境次第で、他の委員に同調する場合とその逆の場合があり得ることが分かった。前者の場合には、委員会の人数が多いほど平均的な意見に同調した投票がおこなわれ、後者の場合には逆となることが示せた。委員会の人数を増やすと情報集計効果により委員会の意思決定は効率的となるが、上記のように個人の選択がより強く歪められるというデメリットがある。委員が同調しない場合は、投票による情報集計が個人の歪んだ投票による非効率性を吸収してくれるため、委員会の人数は無限に増やすことが望ましくなる。しかし、委員間の同調が起こる場合は、委員が共通した投票行動をとる傾向が強まるため、人数を増やして情報集計を進めても、共通した歪みを吸収することができず、必ずしも無限に委員を増やすことが望ましいとは限らない。このようにして、集団的意思決定は集団規模を大きくするほどの確となるという Condorcet 定理の結論が成立しない場合を示すことができた。

(2) このメカニズムを金融政策分析のモデルに応用し、委員間の協調誘因と金融政策委員の最適人数について分析した。透明性により同調が生じると、委員会の人数を増やしてもパフォーマンスが低下するため、金融政策委員会にも最適人数が存在することが示せた。また、透明性の強化やスタッフレポートの導入など共有情報の充実が図られる現代の環境では、金融政策委員会の人数は比較的少なくしておくことが社会厚生観点から望ましいことも示せた。また、金融政策委員会における投票ルールが異なると、情報集計効果の強さが変わるため、それに応じて最適人数も変化することも示せた。

(3) 金融政策委員会に関する実証研究の文献では、委員会の人数とインフレ率の分散が逆U字型となることが知られている。今回の理論モデルは、この事実を理論的に説明している。すなわち、金融政策委員の投票行動の歪みと情報集計の便益がバランスする委員会規模において、インフレの安定がもたらされる可能性が理論的に示唆された。

(4) 金融政策委員会のモデルの応用として、金融政策委員の選好に不確実性がある場合を理論的に分析した。選好の不確実性は景気の安定化と物価変動の安定化の間のトレードオフに不確実性をもたらす。こうした不確実性は金融政策委員会を形成して抑えられることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 盛本圭一	4. 巻 51
2. 論文標題 金融政策の政策目的の異質性と政策効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明星大学経済学研究紀要	6. 最初と最後の頁 31, 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Keiichi Morimoto	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 Further Results on Preference Uncertainty and Monetary Conservatism	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Economics Bulletin	6. 最初と最後の頁 583, 592
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Morimoto Keiichi	4. 巻 9
2. 論文標題 Information Use and the Condorcet Jury Theorem	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Mathematics	6. 最初と最後の頁 1098 ~ 1098
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/math9101098	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Keiichi Morimoto
2. 発表標題 Impacts of Transparency on Heterogeneous Agents
3. 学会等名 The 49th MUETEI Workshop
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

盛本圭一の研究活動

<https://sites.google.com/site/morimotokeiichi/research>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 MUETEI Workshop	開催年 2018年～2018年
---------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------